

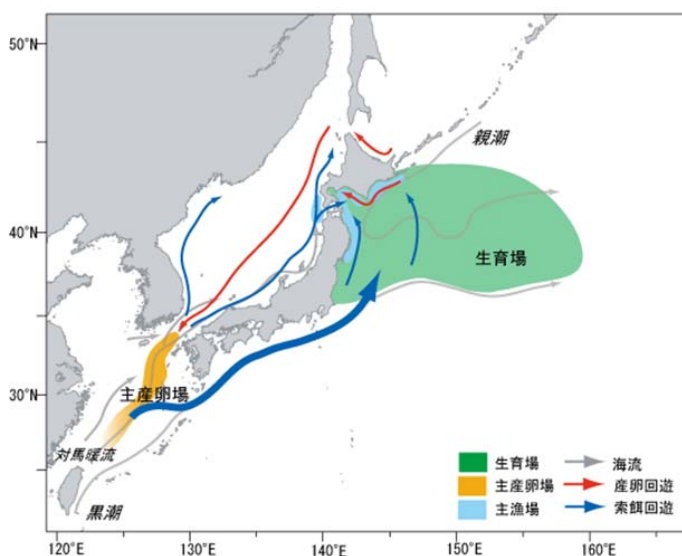


スルメイカ冬季発生系群 平成30年度資源評価結果

1

生物学的特性

スルメイカ冬季発生系群の生活史と漁場形成模式図

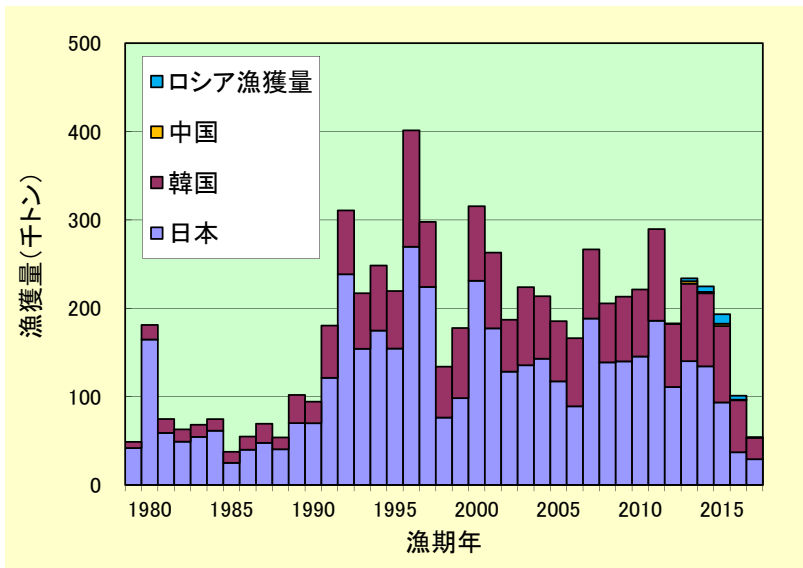


- ・寿命：約1年
- ・成熟開始年齢：雄は約6～7カ月、雌は約7～8カ月以降
- ・産卵期・産卵場：12～3月、東シナ海
- ・食性：甲殻類、小型魚類、いか類
- ・捕食者：主に大型魚類、海産ほ乳類

- ・東シナ海で12～3月に産卵
- ・太平洋を北上、日本海を南下
- ・主に太平洋で8～12月、日本海で11～2月に漁獲

2

漁獲の動向



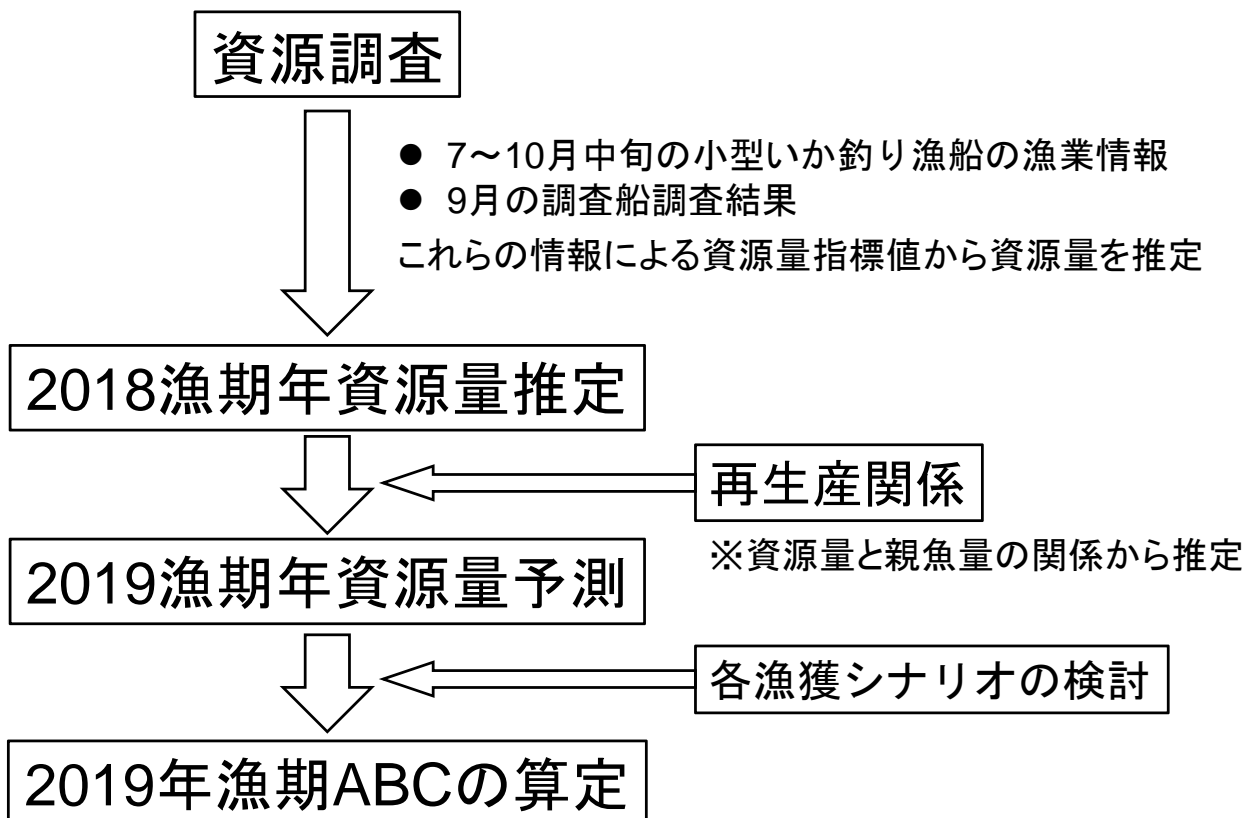
漁期年: 4月～翌年3月

- いか釣り、底曳き網、まき網、定置網で漁獲
- 2017年漁獲量 全体54千トン(前年比53%)

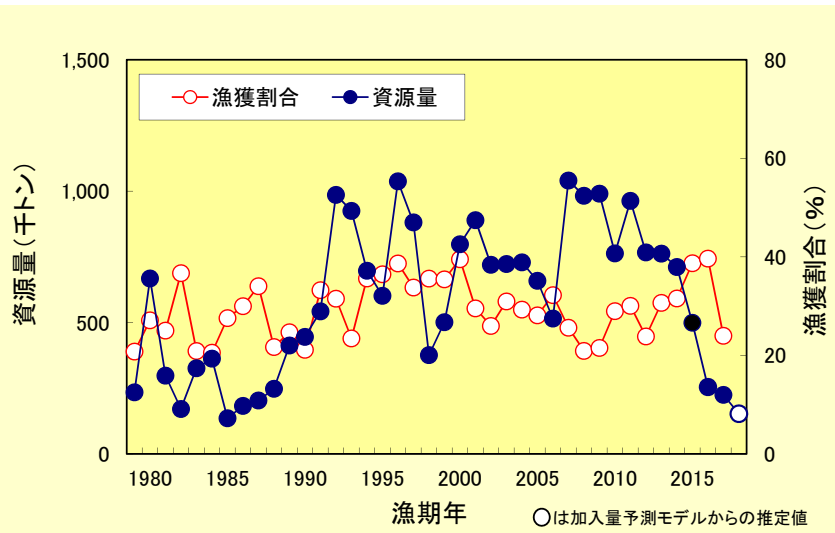
内訳 日本: 29千トン、韓国: 24千トン、中国: 0トン、ロシア: 350トン

*中国とロシアの漁獲量は太平洋海域における漁獲量としてNPFCで報告されているもの
 ロシア 2012年から 中国 2013年から の報告値

資源評価の流れ



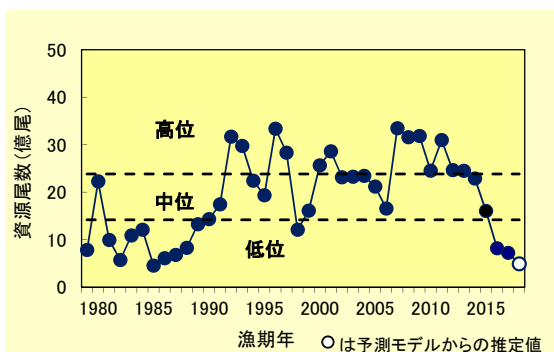
資源の動向①



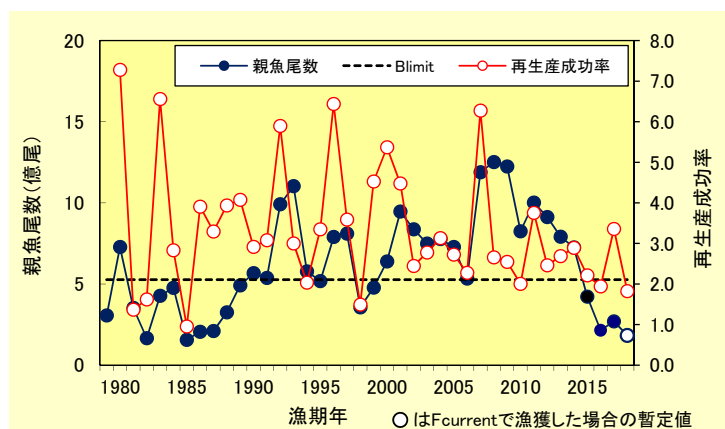
- 資源量： 小型いか釣り漁業や調査船調査の情報を基に推定
2015年以降 減少に転じる
2018年は153千トンと推定(過去2番目に低い)
- 資源動向： 過去5年間の推移から「減少」
- 漁獲割合： 24%

5

資源の動向②



※水準区分 低位/中位: 資源尾数(14.2億尾)
中位/高位: 資源尾数(23.8億尾)



- 資源水準： 資源尾数の推移から「低位」と判断
- Blimit： 回復措置をとる親魚尾数の下限値であり、5.3億尾
(この値を下回ると、高い加入量(毎年、漁獲対象に加わる子供の量)が期待できなくなる水準)
- 2018年漁期後の親魚量は、1.8億尾と推定され、Blimitを下回る
- 再生産成功率： 産まれてから漁獲対象となるまで生き残る確率であり、2002年以降低めの年が多い

6

資源評価のまとめ

- 資源量は2015年以降減少しており、2018年は153千トンで、過去2番目に低い水準と推定された。
- 1979年以降の資源尾数の推移から、資源水準は低位、過去5年間の資源尾数の推移から、動向は減少と判断した。
- 2018年漁期終了後の親魚量はBlimitを下回ると推定されたことから、資源の回復が必要な状況にあると判断した。
- 2002年以降の再生産成功率は低めになる年が多く、産まれてから漁獲対象となるまでに生き残る確率が低下している可能性が考えられた。そのため、将来の加入量の見積もりには、2002年以降の再生産成功率を用いることとした。

7

2019年ABC表

資源量(2019)=152千トンを仮定、親魚量(2018)=57千トン、Blimit=164千トン

漁獲シナリオ (管理基準)	Target/Limit	2019年漁期 ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値 からの増減%)	2023年漁期後の 親魚量 (千トン) (80%区間)	確率評価(%)	
						2023年漁期後に 2018年漁期後の 親魚量を維持	2023年漁期後に Blimitを維持
親魚量の増大 (B/Blimit×Fmed) (Frec)	Target	11	7	0.11(-72%)	382(113~742)	97	79
	Limit	14	9	0.13(-66%)	337(101~656)	96	74
親魚量の増大 (5年でBlimitへ回復) (Frec5yr)	Target	14	9	0.14(-65%)	326(97~637)	96	72
	Limit	18	12	0.17(-56%)	276(82~532)	95	62
		2019年漁期 算定漁獲量 (千トン)					
現状の漁獲圧の維持 (Fcurrent=Fmed)	Target	30	19	0.31(-20%)	139(41~270)	80	25
	Limit	36	24	0.39(±0%)	95(28~184)	61	13

8